研究ノート

幼稚園における音楽表現活動に関する一考察
－お話と音づくり－

櫻井琴音

（西九州大学子ども学部子ども学科）

（平成26年１月９日受理）

A study on music expression activity of the kindergarten
－ Making Story and Sound Effects －

Kotone SAKURAI

（*Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*）

（Accepted January 9, 2014）

西九州大学子ども学部紀要　第５号　31-38（2014）

研究ノート

幼稚園における音楽表現活動に関する一考察
－お話と音づくり－

櫻井琴音

（西九州大学子ども学部子ども学科）

（平成26年１月９日受理）

A study on music expression activity of the kindergarten
－ Making Story and Sound Effects －

Kotone SAKURAI

（*Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*）

（Accepted January 9, 2014）

Abstract

This paper is a report of the music expression activities in the kindergarten. Children experienced some kinds of activities such as listening to the music, making a story and making many kinds of sound effects. Every time, their conversation recorded with IC recorders. Children chose a musical instrument to express the image of the sound and devised rhythm pattern, tone color , range. The activity of the making of sound effects provides a valuable opportunity to perceive several kinds of elements of the music to children.

Key word：Making Story　お話づくり
Sound Effect　効果音
Teaching Material　教材
Expression　表現

Ⅰ．はじめに

表現とは，内面にある感情や思い等を音楽，言語，造形，絵画といった何らかの形を使って外に表す行為を指す。幼稚園教育要領[1]及び保育所保育指針[2]の領域「表現」のねらいには，「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」と記されており，保育現場では日々の生活や表現領域の諸活動を通して，子どもたちの「感性」「表現する力」「創造性」を培っていくことが重視されている。

かつて，幼稚園や保育所における音楽活動は，歌唱，器楽，身体表現を中心とした活動として捉えられる傾向にあった。中には技術指導に重きを置いた活動も見受けられたため，表現技術を子どもに教えるということについての是非も議論されたという経緯がある。領域「表現」が新設された背景には，このような状況に警鐘を鳴らし，表現という視点から子どもと音楽との係わりを捉え直すことの重要性を示すという意図が含まれていた。

領域「表現」が新設されて以降，保育現場では活動内容や保育者の係わり等，様々な面からの検討がなされ，日々の保育の充実に生かされてきた。特に歌唱や器楽等の既存の楽曲を用いた保育プランは多くの文献等で紹介されている。その一方で，音や音楽を介した創造的な音楽表現活動に関する実践事例報告は，未だに少ない。子どもが創造的な音楽表現活動に取り組む際の保育者の係わりについて持田ら（持田・金子 2008）[3]は，自らの保育実践の事例を踏まえ，「子どもが保育者の教育的な配慮からの援助に気を取られたり，あるいは保育者のまなざしを意識してしまうと，子どもの創造的な表現活動が妨げられることがある」と報告している。保育現場における音楽活動の充実を図るには，子どもの発言や創作した作品等に関する事例を通して音楽的な観点からの分析データを蓄積することが望まれる。

Ⅱ．研究目的

本研究では，音楽を傾聴後に曲のイメージを描かせ，それをもとにお話づくりや音づくりといった創作活動への展開を試みた。活動中に得られた子どもの発言を記録し，音づくりの活動を中心に音楽的観点からの内容分析を試みる。

Ⅲ．方法

1．時期　平成24年11月，２回実施
2．対象　N市内の幼稚園　年長児21名
3．内容　１回目　1．音楽を聴き，曲のイメージを描く
　　2．イメージをもとに，お話をつくる
　　２回目　1．楽器の音を聴き比べる
　　2．音づくりに取り組む
4．記録　ビデオカメラ１台とICレコーダー10台を用いて子どもたちの行動と会話を記録した。撮影及び録音に際しては園の許可を取り，研究者のみが視聴し，全てのデータは鍵のかかる場所に保管する等，研究倫理面での配慮を徹底した。

Ⅳ．結果

＜１回目40分＞

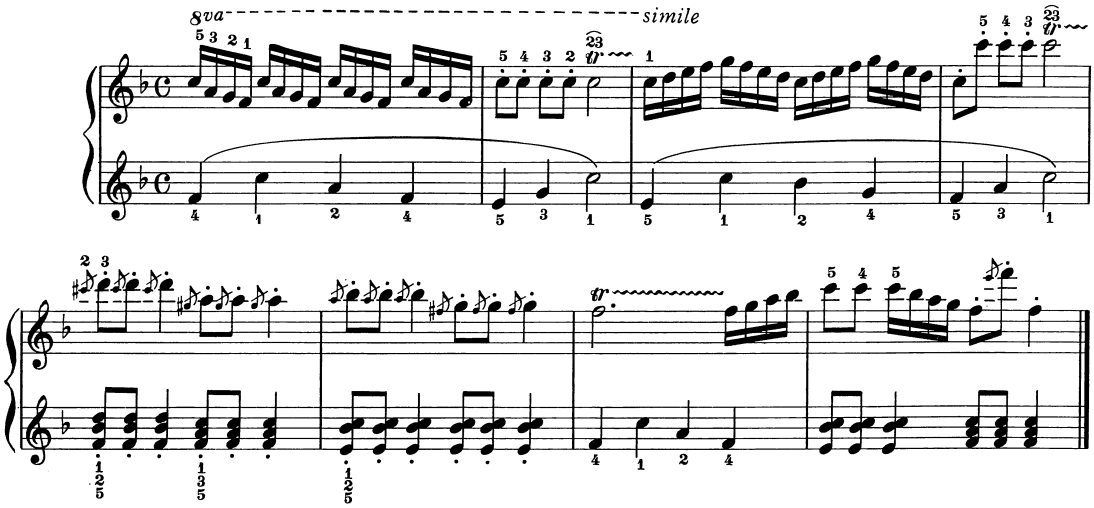
1．音楽を聴き，曲のイメージを描く

使用曲：『ことりになって』[4]

子どもたちとは初対面であったため，自己紹介と「先生とお友だち」を歌いながら全員の子どもと握手をした後，以下の活動へと入っていった。曲名を告げると，子どもたちが描くイメージに影響する可能性があると思われたため，曲名は告げずに演奏した。以下，Ｔは筆者の発言，Ｃは子どもの発言を表す。

Ｔ：先生，今日はね，ピアノを弾いてみようと思っているの。
Ｃ：えー，何の曲？（口々に呟く）
Ｃ：歌？
Ｔ：歌じゃないよ。
Ｃ：何の曲？
Ｔ：きっと，皆はまだ聴いたことがないかもしれない曲だよ。
Ｃ：知らない曲？
Ｃ：知らない曲だって。（口々に呟く）
Ｃ：○○先生（担任教諭の名前）は知ってる曲？
Ｔ：うーん，どうかなあ。もしかしたら，○○先生も初めて聴く曲かもしれないよ。
　耳を澄まして，よく聴いてね。
　じゃあ，弾いてみるよ。

楽譜　『ことりになって』



（子どもが完全に静かになってから，『ことりになって』を１回弾く）

T：どうだった？

C：楽しい感じ。

C：面白い感じ。

T：何をしている時みたいに楽しいの？どんなふうに面白いのかな？
先生がもう一度弾いてみるから，考えてみてね。
（『ことりになって』を再度，１回弾く）

C：あのね，ウサギさんがピョンピョン「かけっこ」しているみたい。

C：くるくる回っているみたい。

C：空から何か降ってきたから，あれあれーって言いながら走っていく。

C：誰が？

C：知らないおじさん。（子どもたちの笑い声）

C：お友だちと遊んでいるみたい。

C：みーんなで，遊ぶ。

C：今日，幼稚園で遊んだ。

C：動物園で遊ぶ。

C：あのねー，この前バスに乗っていったよ，動物園。みんなで行った。

C：遠足の時に行った。

T：遠足の時に動物園に行ったの？いいなあ。

C：カンガルー見たよ。

C：キリンも見たよ。首がニョーンって長かった。

C：弁当食べた。

C：○○君と一緒に食べたよ。

C：お菓子も食べた。

C：僕，ゴリラ大好き。お友だちになりたーい。（笑い声）

T：動物とお友だちになりたいの？

C：うん，なりたい。なりたい。（子どもたちは，口ぐちに「なりたい，なりたい」と言う）

C：僕ね，ゴリラが一番面白かった。（ゴリラの動作をしながら発言する）

C：キリンさんとお友だちになりたい。

C：私はウサギがいいな。だって，可愛いもん。
（子どもたちは口々に遠足のときに見た動物の名前を挙げる）

T：何だか楽しそうなお話ができそうだよ。

C：お話？

T：動物が出てくるお話。

C：作るの？

C：だれが？

T：みんなで作ってみるの。本屋さんにも売っていないお話だよ。・・・・どうする？

C：うーん。

C：つくる。（子どもたちは，口ぐちに「つくる，つくる」と言う）

２．曲のイメージをもとにお話をつくる

上記のような子どもとのやり取りの後，お話づくりの活動へと移行した。子どもの発言は，保育室内のICレコーダーの録音と並行して，その場で文章化しながら書き留めていった。子どもの集中や発言が途切れそうな時には，必要に応じて書き留めたものを用いて「あらすじ」を振り返らせながら，お話づくりの活動を継続していった。子どもたちの発言は，他者の発言に誘発されながら続いた。積極的に発言を繰り返す一部の子どもたちの意見に偏った活動とならぬよう，発言をしていない子どもにも意見

を述べる時間を挿入し，全ての子どもに発言する機会を設けた。

録音を文字化する際には，子どもが発した「あのね」や「えっと，えっと」といった言葉や私語は省き，方言による口語は標準語に置き換えた。このお話づくりに要した時間は約23分間であった。以下は，子どもたちの作品である。

ネコのタマちゃんが，ボールを転がして遊んでいます。
そばではリスのチップ君が歌をうたっています。
小鳥たちが楽しそうに歌い始めました。
ネコたちも歌い出しました。
歌に合わせて，カメくんが踊りだしたよ。
ウサギとタヌキが，「仲間に入れて」と言いながらやってきました。
ウサギは笛を吹きました。ピピピ　ピピピ
タヌキは太鼓を叩きました。ドンドコ，ドンドコ
そこへライオンがやってきました。
「キャアー」皆は怖くなって，逃げてしまいました。
ライオンは悲しくなって，大きな声で泣きました。
エーン，エーン。
あんまり泣いたから，涙がいっぱい出て，海ができました。
皆はライオンが，かわいそうになってきました。
ライオンも仲間に入れてあげることにしました。
仲間に入れてもらったライオンは，ニコニコ顔になりました。
トラ，ゴリラ，ヒョウたちは，ライオン君がうらやましくなりました。
「僕たちも仲間に入れて」と言いながら走ってきました。
ネコが大きな声で言いました。
「皆，あつまれー」「音楽会を始めるよー」
皆で合奏を始めました。
“おもちゃのチャチャチャ”をうたいながら合奏しました。
ライオンが，「お腹がすいたよ」と言いました。
皆でお弁当を食べることにしました。
ライオンは大きなお弁当，ウサギは小さなお弁当です。
「みんなで食べるとおいしいね」
お話をしながら食べました。
「ああ，お腹いっぱいになったよ」
「ごちそうさま」
皆でかくれんぼをして遊びました。
たくさん遊んでいたら，だんだん暗くなってきました。
「また，遊ぼうね」
みんな，お家へ帰っていきました。
おしまい

＜２回目40分＞

２回目は１回目の２週間後に実施した。楽器の活動に入る前に，前回に作ったお話を確認したところ，子どもたちは登場する動物の名前に至るまでしっかりと記憶していた。それを確認した後，以下の活動を行った。

１．楽器の音を聴き比べる

楽器は園の備品に加え，筆者が持参したものも含め20種類の打楽器を用意した。ラチェットやワイヤードラムなど，子どもたちにとって馴染みが無いと思われる楽器もあえて含めた。打楽器は，本来の奏法とは異なる鳴らし方をすると，より多くの種類の音を作り出すことができる。そこで，今回の実践では，各楽器本来の奏法についての説明は行わず，５分程度，各自が自由に楽器に触れることができる時間を設け，その後，音づくりの活動へと移行した。

子どもたちは次々に楽器を手に取り，鳴らしていた。大太鼓を手のひらで打つ，タンブリンの皮を指先でこする等，各楽器本来の奏法とは異なる鳴らし方も見受けられた。

表１　使用楽器一覧

楽器名	台数	楽器名	台数
バスドラム	1	グロッケンシュピール	1
スネアドラム	1	ギロ	1
ボンゴ	1	木魚	1
カバサ	1	卓上木琴	1
クリケット	1	スズ	2
ラチェット	1	カスタネット	2
ビブラスラップ	1	タンブリン	2
ワイヤードラム	1	トライアングル	2
オーシャンドラム	1	マラカス	2
ハンドドラム	1	ウッドブロック	2

２．音づくりに取り組む

物語に登場する順に，持参した動物を描いたイラ

表２　動物名と担当人数

動物名	担当人数
ネコ	女児　１名　・　男児　１名
リス	女児　３名
小鳥たち	女児　２名
カメ	女児　２名　・　男児　１名
ウサギ	女児　３名
タヌキ	男児　２名
ライオン	男児　３名
トラ	男児　２名
ヒョウ	男児　１名
ゴリラ	男児　１名
	計21名

ストカードを黒板に掲示し，各自，音で表現してみたいと思う動物の前に分かれて集合するよう指示した。当初，ネコを希望する子どもがいなかったが，ライオンと小鳥から各１名ずつネコ担当に移動した。各動物の担当人数は，表２の通りである。

音づくりに要した時間は，約15分であった。音づくりの活動中の会話は，IC レコーダーの録音とビデオカメラの音声を，後日，文字化した。その際，お話づくり同様，方言を用いずに記すこととした。録音には，小声での呟きや周囲の音に消されて聴き取れない音声も含まれていたが，これらについては，やむを得ず割愛し，同一グループ内における子ども同士の会話を文字化することとした。

子どもの発言に付した波線は，音色や強弱といった音楽の要素に係わる箇所を示すために筆者が記入したものである。同一グループ内に同性の子どもが複数名いる場合は，グループ内における子ども同士のやり取りの様子を表わすために，番号を付して個々の子どもを区別した。

音づくりではグループ毎に作った音を紹介させた。その後，前回，子どもたちが作ったお話の朗読に効果音として音を入れるという活動を行い，２回目の活動を終了した。音づくりにおける子どもたちの会話は，以下の通りである。

〈ネコ〉

女児：どれにする？
男児：うーん。
女児：ちょっと鳴らしてみようよ。これどう？（ラチェットを手にとる）
男児：ちょっと，大きすぎ。うるさいよ。
女児：もっと小さい音？カスタネットは？
男児：カスタネット？うーん，カスタネットじゃないのにしてみて。
女児：じゃあ，これは？（マラカスを振る）
男児：ええ，それ？（不満そうな声）
女児：もう，○○ちゃんも何か選んでみてよ。
男児：うーん。（楽器群を眺める）
女児：これは？（スズを振って見せる）
男児：うん，それでいいよ。

〈リス〉

女児１：リスの鳴き声って，どんな声？
女児２：しらなーい。
女児３：聞いたことない。
女児１：こまったね。
女児３：うん。
女児２：どうする？
女児３：歩く時の音は？
女児１：聞いたことない。
女児２：私も聞いたことない。
女児３：どうしよう。（３人でいろいろな楽器をならしてみる）
女児３：これは？（クリケットをならす）
女児２：うーん。
女子２：（カバサを振る）これは？
女児１：両方鳴らそうか。（３人，顔を見合わせて笑う）

〈小鳥たち〉

女児１：家にね，ピーちゃんがいるよ。ピピピッ，ピピピッて，なく。
女児２：ピーちゃん？
女児１：うん，ピーちゃん。セキセイインコの名前。ピーちゃんは女の子。オスもいる。
女児２：ふーん。（しばらく楽器を鳴らしながら考えている）
女児２：これは？（マラカスを振る）（次ぎにグロッケンシュピールをならす）
女児１：違う所でたたいてみて。
女児２：（ピピピッ，ピピピッと呟きながら，音域を変えてグロッケンシュピールを叩く）
女児１：（スズをならす）やっぱり，○○ちゃん（女児２）の音の方がいい。
女児２：これにしよう。
女児１：これにしよう。（グロッケンシュピールを選択する）

〈カメ〉

男児：どれにしようかな。（楽器を眺める）
女児１：カメさんの音，カメさんの音。どんな音？

（女児２を見つめる）
女児２：・・・・。（男児を見つめる）
男児：えー？（３人とも互いに顔を見合わせながら，しばらく考え込む）
女児２：カメさん，カメさん。うーん。（男児と女児１を見つめる）
女児１：・・・・。
男児：カメさんノーロ，ノーロ。カメさんノーロ，ノーロ。（呟きながら，ノーロノーロに合わせて，タンブリンの皮を指先で擦る。次ぎに，ウッドブロックを打つ）
女児１：ノーロ，ノーロ。（男児の呟きをまねながら，木魚，スズ，ハンドドラムを打つ）
うーん。
女児２：（男児と女児１をじっと見つめながら，音を聴き比べている）
女児１：どれがいい？
女児２：・・・・。
女児１：ノーロ，ノーロ。（言葉のリズムに合わせて，大太鼓を打つ）
女児２：もうちょっと小さくしてみて。
女児１：ノーロ，ノーロ。（再度，言葉のリズムに合わせて大太鼓を打つ）
このくらい？
女児２：もっと小さく。（女児１が弱めに打つ）
女児２：それにしよう。
男児：よっしゃあ。やっと決まった。
〈ウサギ〉
女児１：ど・れ・に・し・よ・う・か・な。
女児２：いっぱいあるね。（楽器を見渡す）
女児３：ど・れ・に・し・よ・う・か・な。（女児１の口調をまねながら，他のグループの様子を見渡す）（３人とも色々な楽器を手に取り，思い思いに鳴らしてみる）
女児２：かわいい音がする。（卓上木琴でグリッサンド奏をしながら呟く）
女児１：貸して，貸して。
女児３：私も，貸して。
女児２：かわいいよ。
女児１：かわいい。かわいい。
女児３：これ，かわいーい。
〈タヌキ〉
男児１：（ワイヤードラムを鳴らす）ワオーッて感じ。
男児２：貸して。（ワイヤードラムを鳴らす）
これって，ライオンみたい。
男児１：うん。ガオーッて，ライオン。
ねえ，ねえ，○○ちゃん。これ，ライオンで使ったら？（ライオン担当の子どもに鳴らしながら手渡す）
男児２：僕たちのが，なくなるじゃん。
男児１：探せばいいやん。（しばらく楽器を鳴らしてみる）
男児１：これとこれは？（ハンドドラム，ウッドブロックをならす）
男児２：これは？（ボンゴをならす）
男児１：じゃあ，全部。
男児２：全部で決まりー。
〈ライオン〉
男児１：貸して，貸して。（タヌキ担当の子どもからワイヤードラムを受け取る）
男児２：僕も。（男児１からワイヤードラムを受け取り，鳴らしてみる）
男児３：ライオンにピッタリやん。
これにしようか。（男児１と２に話しかける）
男児２：うん。
男児１：ねえ，ねえ，もう一回貸して。（ワイヤードラムを受け取り，鳴らしてみる）
ガオーッ。
〈トラ〉
男児１：これじゃない。（カスタネットを鳴らしながら呟く）
これも違う。（木魚を鳴らしながら呟く）
男児２：何か，強そうな音ないかなあ。（二人とも，しばらく色々な楽器を手に取り考える）
男児２：大太鼓は？
男児１：鳴らしてみて。
男児２：こんな感じ？
男児１：もっと大きな音にしてみて。
男児２：（大太鼓を鳴らす）
男児１：もっと。
男児２：えー，もっと？（さらに強く鳴らす）
男児１：強そう。
男児２：これにしようか。
男児１：うん。
〈ヒョウ〉
男児：（他のグループの様子をうかがっている）
これに決めた。（ビブラスラップを手に取る）

これ，カーッて，強そうな音がする。（ゴリラ担当の子どもに，自慢げに鳴らしてみせる）

〈ゴリラ〉

男児：ゴリラは僕一人かあ。（独り言）
（ヒョウ担当の子を見て）〇〇ちゃんも一緒に考えてよ。（ヒョウ担当の子どもに話しかける）

ヒョウ担当：いいよ。

男児：〇〇ちゃん（ヒョウ）のと違うのがいい。どれにしようかなあ。

ヒョウ担当：これは？（小太鼓を叩いてみせる）

男児：・・・。

ヒョウ担当：これは？（木魚を叩いてみせる）

男児：・・・・。何か違う。強そうなのがいい。

ヒョウ担当：じゃあ，これは？（タンブリンを強く叩いてみせる）

男児：何か違う。それじゃない。（他のグループの子どもが鳴らしているラチェットの音に気付き，借りてくる）
これ，これ。これにする。（ゴリラが，）ガガガガーッて胸を叩いているみたい。

Ⅴ．考察

身の回りの音や曲を傾聴して音・音楽を知覚することは，歌唱や器楽等，全ての音楽表現活動の基盤となる活動である。本研究では５歳児を対象に曲を傾聴させ，その後，曲のイメージを描く，そのイメージをもとにお話を作る，イメージした音を楽器で表現するといった創作活動へと移行した。また，この実践中に得られた子どもたちの発言を記録することにより，音と向き合う子どもの姿を追った。

今回の実践で使用した曲は，８小節からなる身体表現教材である。短いながらもトリルや短前打音，スタッカート等が含まれており，曲全体が変化に富んでいる。演奏所要時間は20秒程度であることから，幼児期の子どもたちが無理なく最後まで集中して傾聴することができると考え選曲した。

第１回目に取り上げたお話づくりは，音楽を聴いて思い描いたイメージを言語化する活動である。子どもからは，「楽しい感じ」「面白い感じ」という発言が得られた。曲中に含まれている装飾音による細かい音の動き，音の跳躍，レガートとスタッカートの対比等の要素が，この発言を引き出したものと考えられる。

曲のイメージに係わる発言の後，子どもたちからどのような発言が得られるのかを知るために，しばらく様子を見守った。子どもたちの発言は，他者の発言に誘発されながら続き，遠足で動物園に行った時に体験した内容へと移っていった。発言内容をみると，提示した曲のイメージとは離れていっているため，一見，活動のねらいから離れたかのようにも見うけられる。しかし，お話づくりや音づくり等のように言語での表現を必要とする創作活動に取り組む前段階においては，このように子どもたち同士が意見を述べ合う時間の確保は重要であると思われる。

音づくりの活動では子ども同士の発言を引き出すために，動物ごとに分かれて小人数で取り組ませた。＜ネコ＞のグループでは，女児がネコのイメージとして提示したラチェットの音に対し，男児が「大きすぎ」と発言した。そこで，女児がカスタネットやマラカスを提示したが，男児はそれではないと答えている。子どもたちは，音の強さの違いや音色の違いに着目している。＜小鳥たち＞のグループでは，楽器の音色に加え，グロッケンシュピールの音域を変えて聴き比べている。偶発的に得た音の違いに気付き，音域の違いに着目した表現を試みている。＜カメ＞を担当した子どもたちは，小鳥と違ってカメの音を思い浮かべることができず，互いに顔を見合わせながらしばらく考え込んでいた。この間，楽器を眺めるばかりで，なかなか楽器を手に取ることもできずにいた。カメの動きを表す「ノーロ，ノーロ」と言う男児の呟きを受け，他の女児たちも「ノーロ，ノーロ」と言いながら楽器を鳴らし始めた。言葉の持つリズムが，音づくりに活かされている。＜ウサギ＞のグループは，可愛い音を探していた。上行する卓上木琴のグリッサンドの音を彼らは可愛い音と捉え，これをウサギの音に選んだ。＜タヌキ＞のグループは，偶然，手にしたワイヤードラムの音がライオンらしい音だと思い，自分たちが見つけた音を＜ライオン＞担当の子どもに勧めている。子ども同士で協力し合う姿が見て取れる。＜トラ＞の子どもたちは色々な楽器を鳴らしてみた結果，大太鼓を選択した。トラの力強さを表現したいらしく，遠慮がちに鳴らしていた子どもに対して，もっと強く打つよう，仲間が繰り返し指示を出していた。音の強弱に目を向けている。＜ヒョウ＞担当の男児は，自分で楽器を手に取って鳴らすのではなく，他のグループの子どもたちのそばへ行き，活動の様子をじっと

見つめていた。ビブラスラップの小刻みに連続して鳴り響く音を聴き，それを使用することに決めた。

＜ゴリラ＞担当の男児は，一緒に効果音を考えてくれるよう，＜ヒョウ＞担当の子どもに協力を求めた。それを受け＜ヒョウ＞担当の男児は，数種類の楽器を提案してみるが，＜ゴリラ＞担当の子どもは，どれもが納得できずにいる。しかし偶然，他のグループの子どもが鳴らしたラチェットの音に気づき，それを借りてくる。ゴリラが胸を叩いている音をラチェットで表現することにした。

以上のように，音づくりの活動における各グループの子どもたちの会話には，「音色」「強弱」「音域」「リズム」といった音楽の要素に関連する内容の発言が随所に現れていた。このことから，音づくりの活動は，子どもたちに音楽の諸要素に目を向けるきっかけをもたらし，工夫しながら音を作る体験を通して音楽の要素を知覚していく上で，有用な活動と成り得ると言えよう。

今回のような創作活動は，既存の楽曲の歌唱や合奏に比べ，活動の見通しが立ちにくかった。これは，保育者が創作活動を実践する際の不安要因となり得るであろう。音楽に対して苦手意識を持つ保育者であれば，さらにこの思いが強まる可能性は高い。今後，音楽の創作活動における実践データの蓄積を図り，事例をもとに活動の展開や保育者の係わりを検討する必要がある。

Ⅵ．おわりに

音づくりの活動では，子ども同士の会話の中に「音色」「強弱」「音域」「リズム」といった音楽要素に係わる発言が随所に含まれているということを確認することができた。また，活動時の映像にも，試行錯誤を繰り返すうちに音楽要素に着目するようになり，協力し合って音を創作している子どものたちの姿を見ることができた。

これらの音楽要素は，小学校音楽科学習指導要領の共通事項にも記載されている。保幼小連携教育の重要性が強調されるようになって久しいが，「音楽の何を教えるのか」，すなわち「音楽の学習内容を繋いでいく」ということに目を向けるならば，幼稚園・保育所における音楽表現活動と小学校音楽科における学習内容を繋ぐための活動プランが必要となる。

今後，さらに保育現場における音楽表現領域の諸活動の実践を重ね，それらの事例をもとに子どもの学びの連続性・一貫性を意図した保育現場における具体的な活動プラン作成に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究では，子どもの発言を聴き取るための貴重な機会を頂きました。また，倫理面での配慮を徹底するためのデータ保管にもご協力頂きました。幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

1．文部科学省　幼稚園教育要領　平成20年
2．厚生労働省　保育所保育指針　平成20年
3．持田京子・金子智栄子『こどもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響』文京学院大学人間学部研究紀要　Vol. 10　No. 1　pp. 37-47　2008
4．全国大学音楽教育学会編　『新しい表現を取り入れた，保育者養成の為のピアノテキスト』p. 53カワイ出版　1992